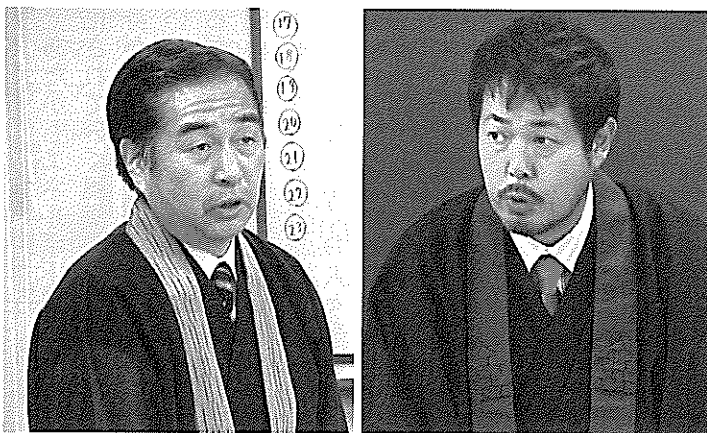


## 点描

## 教化本部発足

## 教区教化は教区人の手で (下)

## 北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No.34 最終回

2011  
平成23年

教化本部の歴史を紡ぐ黒萩昌第4期教化本部長(左)と金石潤導第5期教化本部長(右)

二〇一〇年(平成22)12月の「教化本部発足の願いに聞く」をテーマとした座談会で進行したのは、黒萩昌教化本部長(当時)である。この座談で本部長が最後までこだわったのは、最晩年の水上尚順氏が語られた「マンネリ化」であった。「教区の教化に携わる人はマンネリ化ということをきちんと押さえたい。そして、自分たちのやったことを検証しながら、新しいこと、新しいことに歩みを進めてもらいたい」(二〇〇八年インタビュー)

このマンネリ化に対して、教化本部発足時に本部長を務めた藤田彰美氏は、「マンネリ化」ということは、本部制そのものが教区人に認知されたということもあるかもしれない。今は教区会と対決しないでしょう。立ち上げた当時は、そんなことを言ったら、教区会にどう言われるだろうかと、ある意味で戦々恐々としていました。案の定、結構な反発もありました。常に自分自身を破ってくれる存在がないと、どうしてもマンネリ化ということになっていく」と当時を振り返る。

一九九九年(平成11)に発足した教化本部は、順風満帆に出発したわけではない。前年7月の通常会において教区門徒会で承認されながら、教区会では議決に至らず、教区会議長の判断により審議未了につき不採決と裁定して、暫時休憩をもって散会。教区会議員は、教化本部の案件を各組へ持ち帰って議論を重ね、9月に再開された臨時教区会をもって議決に至るといふ経緯を辿っている。

しかし、黒萩本部長は、座談の中で「本部を徹しく破ってくるような存在は、果たして外に見出されるべきものなのか。むしろ、我々本部の中にそういう自らを検証して破っていく眼を持っていかねればならないのではないか」と自問する。

真宗同朋会運動は、危機を感じ取った感性によって動き出した運動である。五十年前の当初は、新宗教の勢いや、寺院の体制が崩れていくという危機感があった。しかし、高度経済成長以降、寺院経済が豊かになったことよって当初の危機感が失われていったと指摘されている。

中岡明秀氏は、この状況を踏まえながら、「今の危機感は、門徒との距離感ができたことだろうと感じる」と語る。

本部長がこだわった点は、ここにあった。つまり、危機の意識は当然、自分が身を据える寺院という「現場」に行かなければならない。しかし、教区教化に関わることよって、自分はやっているという意識に陥り込み、現場に居ることの虚しさをすり替えてはいないか、自らを検証する眼を失っていないか、と。

この問題意識に対し伊藤篤氏は「マンネリというのは、留まって停滞しているというより、後退なのだと思ふのですね。でも、そのことに気がつくということが非常に大事なことであって、そのことを教化本部に関わるみんなが共通の認識として持てば、それは克服できるだろうと期待しています」とエールを送った。

教化本部は、発足から4期12年を経た。教区内の厳しい声、時代の変化を受けながら、教区教化の事業は展開してきた。その事業は一つの寺院がいかに立ち上がったいくのかに収斂されていくように思える。そして今、確認されているのは、「教区のすべての事業は、寺院という現場のためにある」である。

二〇一一年(平成23)9月、教化本部にかけられた願いや流れを継承して、金石潤導氏が第5期教化本部長に就任した。寺院という現場を指向する真宗同朋会運動のこれからの歴史は、ここから紡がれていく。